

校友による循環型サポートプログラム^{注1)}の開発

— 校友が支える立命館アジア太平洋大学をめざして

古川 恵子 (APU 学長室課長補佐)

今村 正治 (大学行政研究・研修
センター兼任講師)

村上 健 (APU 事務局次長)

名主川久仁 (APU 学長室課長)

I. 研究の背景

1. 開学 10 周年を迎える APU
2. APU 校友会の状況と学生参加の仕組み
3. 多文化環境・就職率・ネットワークに期待する父母
4. 国際化拠点整備事業 (グローバル 30) に対する APU の強み
5. 研究背景のまとめ

II. 研究の目的

III. 研究の方法

1. 他大学 (国内外) 校友会の事例調査
2. 校友・学生・教職員へのアンケート調査
3. 文献研究

IV. 調査・分析

1. 他大学 (国内外) 校友会の事例調査

2. 校友・学生・教職員が考える校友による学生支援

3. 文献研究

V. 政策立案

1. 政策の位置づけ

2. 個々の政策

- (1) 学生募集活動サポート

- (2) 就職活動サポート

- (3) 校友会イベントを通じた校友と学生の交流

- (4) SNS を活用した校友と学生の交流

VI. 研究のまとめ

VII. 残された研究課題

I. 研究の背景

1. 開学 10 周年を迎える APU

立命館アジア太平洋大学 (以下、APU) は、2000 年 4 月、立命館創始 130 年・学園創立 100 周年記念事業の一環として、大分県別府市に開学した。『立命館アジア太平洋大学誕生物語』^{注2)}で触れられているように、APU は大分県、別府市、学校法人立命館の公私協力によって設立された大学であり、行政のみならず大分県民、別府市民の理解と協力を得て学生を育ててきた大学でもある。そして 2010 年 4 月、開学 10 周年を迎える。2009 年 11 月 1 日現在、96 カ国・地域から 2,924 名の国際学生 (留学生) が集い、3,238 名の国内学生が学ぶ国際大学である。2009 年 9 月末現在、国際校友 (国際学生の校友) 2,557 名、国内校友 (国内学生の校友) 2,994 名の計 5,551 名が卒業しており、今後も年間約 1,000 名ずつが卒業していく。

開学 10 周年を迎えて重要となるのは、APU 誕生時に

はいなかった校友の存在である。校友が大学づくりや学生の成長にどう参画し、その力をどう発揮するのか、大学がそれらをどう組織するのかが、開学 10 年を経た今、より重要な課題となってきている。

2. APU 校友会の状況と学生参加の仕組み

(1) 学生の校友会参加の仕組みと活動

APU は国内外に校友組織を設立しつつある。校友会全体の組織である「APU 校友会」は、早期卒業生が初めて卒業する 2003 年 3 月に設立された。当初、APU 校友会は会員構成を卒業生および教職員としていたが、2006 年に会則変更を行い^{注3)}、卒業生・教職員を「正会員」、学生を「準会員」とし、学生も含めた校友会組織^{注4)}に変更した。このような会員構成の変更を行ったのは、校友会が 2005 年に本格的活動を始めたものの、卒業後に校友会の告知を行ってはいは、既に海外に散っている国際校友を有効に組織できなくなるからであった。そこで学

表1 2008年度APU校友会イベント

実施日	名称	内容	開催場所・地域	実施者	参加人数	対象	
						校友	学生
5月19日～31日	先輩(校友)の活動紹介	掲示による学生告知	APUキャンパス	校友会実行委員会	—		○
7月18日	地域イベント(九州)	懇親会	別府	APU校友会	18	○	○
7月19日	地域イベント(中部)	懇親会	名古屋	APU校友会	8	○	○
7月21日～22日	夢応援プロジェクト	校友・学生の懇談	APUキャンパス	校友会実行委員会	37	○	○
9月12日	校友会歓迎パーティ(秋卒対象)	パーティ	APUキャンパス	校友会実行委員会	250	○	○
10月～12月(計4回)	校友会実行委員会・活動紹介企画	ブースでの活動紹介	APUキャンパス	校友会実行委員会	—		○
10月18日	地域イベント(関西)	懇親会	京都	APU校友会	36	○	
11月1日	APU(ALL-Rits) 校友大会	総会	京都	APU校友会	48	○	
11月13-14日	ゼミ紹介	2回生向けゼミ紹介	APUキャンパス	校友会実行委員会	100		○
11月21日	地域イベント(九州)	懇親会	別府	APU校友会	29	○	○
12月6日	地域イベント(関東)	懇親会(東京湾クルーズ)	東京	APU校友会	62	○	
2月28日	就活イベント(関東・関西)	校友による就職相談	大阪オフィス・東京キャンパス	APU校友会	74	○	○
3月13日	校友会歓迎パーティ(春卒対象)	パーティ	別府・ビーコンプラザ	校友会実行委員会	500	○	○
3月13日	地域イベント(九州)	懇親会	別府	APU校友会	43	○	○
3月28日	有志による就活イベント	校友による就職相談	東京キャンパス	校友有志	75	○	○
						12	11

生を「準会員」とすることにより、学生時代から学生が校友と校友会とのつながりを持てるようにした。

現在APU校友会は、国内外で校友同士の懇親、立命館大学校友会との連携のほか、学生も参加出来るイベント(表1網掛け部分)を催し、校友と学生とのつながりに努めている。

また、国際校友が約半数いることから、APU校友会は、Webを利用したコミュニケーションに努めている。APU校友会ホームページ(図1)で校友会や大学イベントの告知、校友によるリレーエッセイ、校友検索・掲示板機能(校友専用コンテンツ)、転送メールサービス^{注5)}、メールマガジンの発行を行い、Web上でのコミュニケーションを図っている。



図1 APU校友会ホームページ

このような学生を含めた校友会活動を行うようになって3年が経つ。しかし、2009年6月～7月に行った学生アンケート(IV-2-(2)学生アンケート①)では、APU校友会の存在については「知っている」70%、「知らない」28%であるものの、APU校友会のホームページについては「見たことがある」27%、「見たことがない」71%という結果になった。また、個人情報保護の観点から、ホームページの校友検索機能・掲示板機能は、学生

の利用が出来ない。ホームページの全面リニューアル検討に合わせ、Webを利用した新たな機能を付与し、校友・学生の双方が利用できるWebコミュニケーションの仕組みが求められている。

(2) 海外校友会の設立と今後の活動

APU校友会には海外校友会がある。海外校友会は、2007年11月に中国・上海、2008年1月に台湾、2008年11月に韓国、2009年2月にフィリピン、3月にマレーシア、4月にベトナム、11月にタイ、そして2010年2月にはインドネシアで校友会が設立された。

海外校友会はAPU校友会の地域組織であり、日本国内で活動している関東、中部、関西、中四国、九州の各地域組織と同列の位置づけとしている。

2008年11月にはAPU校友会の総会にあたる「APU校友大会」の実施にあわせ、それまでに設立された中国・上海、台湾、韓国の校友会会長が、各国での校友会の活動状況を報告した。報告では、現状は校友同士の懇親を中心とした集まりになっているが、今後は活動を校友だけに限定するのではなく、学生とのかかわりを望む声も出されていた。

(3) 下部組織としてのAPU校友会実行委員会

APU校友会には、学生が校友会活動に参加する組織として「APU校友会実行委員会」がある。実行委員会は、1期生(2000年入学)が卒業する年の2004年1月に活動を始めた。これは、卒業を目前に控えた1期生が「卒業後もつながりを維持できる組織を持ちたい」との思いから登録イベント実行委員会^{注6)}として組織し活動したもので、APU校友会はこの実行委員会によって礎が築かれた。当時、大学サイドでも校友の組織化に取り組んでいたため、実行委員会設立以来、校友会担当オフィス

(現在は学長室)と協力関係にある。現在も校友会担当職員が、毎週1回実施される実行委員会ミーティングに出席している。メンバーは2・3回生中心に10名程で、校友会の下部組織として活動をしている。

実行委員会メンバーは、イベントを通じた校友からの学び、校友と学生の仲を取り持つ充実感、回生を超えた学生同士のつながりを求めて活動を続けている。彼らは、表1に記載の活動を通じて校友会の存在意義を実感し、学生に校友会を浸透させるべく日々尽力している。

3. 多文化環境・就職率・ネットワークに期待する父母

APUには、国内の父母組織である「APU-Club・国内学生父母の会」^{注7)}があるほか、海外にも韓国・インドネシア・タイ・中国(上海)・台湾・フィリピン・マレーシア・ベトナム^{注8)}に父母組織がある。海外父母会は、APUと現地父母の橋渡しのほか、現地の校友会とも協力しながら、マルチカルチュラルウィーク^{注9)}支援や学生活動の支援を行っている。

2009年3月から4月にかけて、総会を実施した韓国と上海、そして入学式に参加した国内(日本)父母にアンケートをとり、APUを選択するにあたって、父母にとって「決め手」となった事を複数回答で聞いた(図2)。

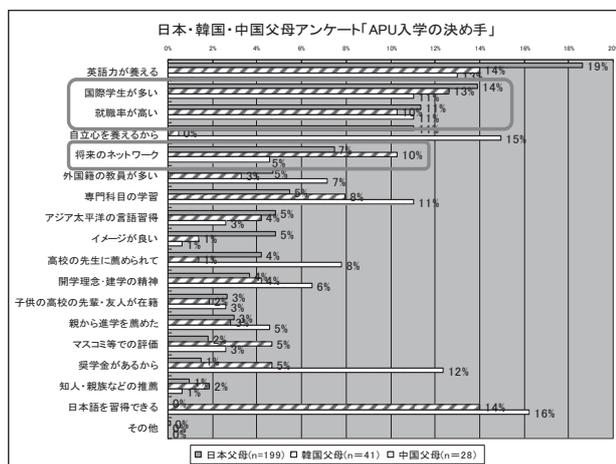


図2 日本・韓国・中国父母アンケート「APU入学の決め手」

その結果、いずれの国においても、「語学修得」が上位を占め、次に「国際学生が多い」こと、そして「就職率が高い」という順になっている。その中で国際大学APUの性格から特筆すべきことは、「将来のネットワーク」が日本で上位5位、韓国で上位4位にあることである。アンケートの回答からは、国際学生が多い多文化環

境の中で友人関係を構築し、卒業後にはそのネットワークを活かして国際的に大いに活躍してほしいという父母の期待が伺える。

卒業後あるいは将来のネットワークは、まさにAPU校友の財産である。APUは校友が持つグローバルネットワークを、後輩である学生の「入口」から「出口」までのサポートに活かす必要がある。つまり、校友の力を入学前の国内外学生募集、在学中の学び、そして卒業前の国内外進路・就職に活かすことが出来れば、学生の「学びと成長」を支援することができることになる。これは次に述べるグローバル30選定校に対しても、APU独自の強み、優位性になる。

4. 国際化拠点整備事業(グローバル30)に対するAPUの強み

2009年7月、文部科学省はAPUをモデルとした「国際化拠点整備事業(グローバル30)」の選定校13校を発表した。APUはこの整備事業が目標としているものを達成しており、今後グローバル30の事業に認定された大規模校とAPUは、多くの国・地域で国際学生の確保をめぐる競争を削ることになる。

APUが日本にある国際大学として今後30年、50年、100年と発展し、日本の大学の国際化、国際標準の「先導役」を果たすには、これらグローバル30に選定された大学の二歩も三歩も先を行く先進的、創造的取り組みが必要となる。翻って考えると、グローバル30に採択された大学は、APUが切り拓いてきた道をこれから辿ることになる。先んじているAPUの強みは、10年間の取り組みの蓄積と、これらグローバル30に選ばれる大学にはない「海外を含めた校友の存在」である。APUがグローバル30のモデルであり、日本の大学の国際化の「先導役」であろうとするならば、APUは一大学の利益を超えて、日本の国際大学として、校友のグローバルなネットワーク形成とともに、「校友-学生-大学」の新しいあり方をグローバル30のモデルとして開発しなければならない。

5. 研究背景のまとめ

以上のように、開学10周年を迎えるAPUでは海外校友会を含めた「APU校友会」が立ち上がっており、校友会下部組織である学生の実行委員会の活動など、校友会の組織と運営に「校友-学生」の交流を図る仕組みが組み込まれている。つまり、校友の力を大学づくり・教

育づくりに活かす条件と体制を有しているといえる。「校友-学生」のネットワークはAPUの財産であり、学生の「学びと成長」に、そして、先の父母アンケートに見られたネットワーク形成への父母の期待からも、活かさなければならない。

APUは、グローバル30のモデルとして日本の大学の国際化を先導するためにも、校友のグローバルなネットワーク形成とともに、「校友-学生-大学」の新しいあり方を開発するターニングポイントを迎えている。

II. 研究の目的

本研究の目的は、開学10周年を契機に校友の力をAPUに集結し、特に「校友-学生-大学」支援の循環型サポートプログラムを開発することである。循環型とは、「校友-学生-大学」のAPUネットワークを形成することによって、校友が学生をサポートし、そのサポートを受けた学生が卒業した後に校友として学生をサポートするというサイクルを作り出すことを意味する。

プログラムは学生の「入口」・「出口」での校友支援、学生と校友の「出会い」の場を提供、コミュニケーション・システムの開発に焦点を合わせたものとする。

III. 研究の方法

プログラムを開発するため、次の方法で調査・研究を行なう。

1. 他大学（国内外）校友会の事例調査

国内外大学の校友活動の事例を、訪問によるヒヤリ

ング、文献、ホームページ等で調査・研究する。

2. 校友・学生・教職員へのアンケート調査

校友にこれまでの学生支援経験の有無やその感想、また今後どのような学生支援を行ないたいのかなどの調査を行なう。他方、学生や教職員が校友にどのような支援を求めているかを調査する。

3. 文献研究

調査内容を補完するために、先行文献を通しプログラム構築時の留意点を探る。

IV. 調査・分析

1. 他大学（国内外）校友会の事例調査

(1) 他大学校友組織における学生支援の状況

目的：校友による学生支援が活発な大学において、支援内容・方法を調査し、APUにふさわしい学生支援のあり方を検討する。

対象：表2に記載の国内大学3校、海外大学5校（①～⑧）

方法：訪問によるヒヤリング（①～②、⑥～⑧）、電話（③）、文献（④）、ホームページ（⑤）

実施日：2009年6月15・16日（①・②）、7月16日（③）9月9日～17日（⑥～⑧）

質問ポイント：A) 校友が学生募集活動をサポートする取り組み、B) 校友が学生の就職活動サポートをする取り組み、C) 校友と学生が関わるイベント、D) Webの活用

表2 国内外大学の校友会活動調査

大学名	組織概要	調査・ヒヤリング内容
① 慶應義塾大学 塾員センター	校友（塾員）有志が自発的に集い運営する同窓会組織として、「三田会」がある。塾員制度が始まったのは、明治22年（1889年）。塾員数は約32万人。	<p>B) 就職活動学生のOB・OG訪問</p> <p>就職活動学生（塾生）のOB・OG訪問のため、就職・進路支援担当オフィスで本人確認を含めた所定の閲覧申請手続きをさせた上で、紙ベースの「塾員情報（就職活動用）」とパソコンによる「塾員検索システム」を閲覧・検索することが出来る。</p> <p>掲載されているのは、1992年以降の卒業で、公開可としている塾員の情報である。「塾員情報（就職活動用）」に掲載している情報は、a) 氏名 b) 卒業学部・学科・研究科 c) 卒業・修了年 d) 勤務先 e) 自宅住所で、各企業から入手している。勤務先の部署名・電話番号が入っているところもあればそうでないところもある。「塾員検索システム」で検索できる項目は、上記「塾員情報」と同じ。</p> <p>学生は探した情報を利用して、自宅住所に手紙を送るか、企業の人事（採用）担当部署やOB・OGの所属する部署に電話をして、OB・OG訪問の目的を告げ、アポイントの依頼をするが、自宅への手紙が主流である。なお、メール対応は行っていない。現在6割ほどの塾員情報が登録されている。</p> <p>C) 慶應連合三田会大会（塾員の同窓会）</p> <p>毎年秋に日吉キャンパスで開催。塾員・塾員家族・塾生が集う年に一度の祭典。参加者約2万人。卒業10年・20年・30年・40年目の塾員が当番年として、ボランティアで運営。縦・横・斜めの交流を通し、慶應ファミリーの絆を深める。</p>

校友による循環型サポートプログラムの開発（古川・今村・村上・名主川）

② 一橋大学 如水会	1914年に母校防衛を理念に設立し、1916年に社団法人となった。会員は約3万2千人。生存している校友の約70%が会員。	C) 植樹会の実施 40年前から実施しているが5年前に実施方法を変更し、キャンパス整備のために学生・教職員・校友が参加する形態にした。作業は月1回程度。東京農工大学が作成した基本計画に沿って実施している。実施当初は学生も遠巻きに見ていたが、揃いのグッズを身につけて目立つ工夫を行った結果、学生の参加数が増え、参加者は毎回40～50名になっている。作業後には、学内で交流会を行う。
③ 立命館大学 キャリアセンター	キャリア・アドバイザーの登録者数は、文系卒が2,300～2,400名、理系卒が150～200名程度。	B) キャリア・アドバイザー制度 就職して数年の若手OB・OGがキャリア・アドバイザー（以下CA）として登録する制度があり、学生との懇談会である「CA懇談会」を通して現役学生へのアドバイスをを行っている。CAには、ジュニア・アドバイザー（就職内定を得た学生が、就職活動体験を基に後輩への助言・援助を行う）経験者が卒業後CAとなる。CAは有償（交通費支給、例年開催企画は謝礼あり）のボランティア。毎年11月・12月に衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパスでCA懇談会を実施しており、2008年は60名程度のCAが参加した。東京では年2回マスコミ関連のCA懇談会を行い、週末に模擬面接をしてもらうこともある。
④ ハーバード大学 (Harvard University)	1636年設立の私立大学で、アメリカ・マサチューセッツ州ケンブリッジ市に本部を置く。全世界70カ国に165の校友会支部がある。	A) 海外での学生募集 山田礼子「アメリカの大学における最近の同窓会戦略」 ^{注10} によると、「アメリカ以外の国でハーバードに入学したいという優秀な高校生がいる場合、同窓会組織が動き、OBやOGが無償でそうした高校生への面接を行う。面接に際してもマニュアルや評価基準が確立されており、有効に機能しているだけでなく、同窓生たちも優秀な学生の獲得に対して労を惜まず協力する」という。
⑤ イェール大学 (Yale University)	1701年に設置された私立大学。アメリカ国内に140以上、海外に40以上の校友会支部がある。	C) Reunions2009 2009年5月28日～31日（卒業65年目、60年、35年、30年、25年、20年、15年を招待）と、6月4日～7日（卒業55年目、50年、45年、40年、10年、5年を招待）にホームカミングデーを開催。卒業年ごとに5年おきに招待する。今回は全体で6,200名ほどの校友が参加。卒業年ごとに代表者を決めて、参加呼びかけを行っている。 C) Yale Day of Service 2009年5月16日に開催。3500名以上の校友が、40州、12カ国、170のグループに分かれ、炊き出しや公園の清掃、ホームシェルターや学校でのボランティア活動を行った。
⑥ ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (London School of Economics & Political Science : LSE)	1895年設立の公立大学。ロンドン中心部にキャンパスを構える、社会科学に特化したロンドン大学を構成する研究・教育機関。	B) メンター・メンティー制度 制度利用時はホームページからパスワードでログインする。相談はメールのほか、顔を合わせて行う場合もある。メンターで人気があって困る場合、メンター自身の判断で情報を隠すこともできる（2ヶ月間の限定とするなど）。他にネットワークづくりのため、特定分野のキャリアがある人と名刺交換するイベントもある。 A・C) Pre Departure Event 50～60の海外校友グループがあり、実際の程度活動しているかは不明。Pre Departure Eventを毎年夏（入学前）に新入生歓迎会を開催している地域がある。このイベントをすることで校友と学生のコネクションができる。
⑦ リヴァプール大学 (University of Liverpool)	1882年創立の国立大学。イギリス北西部の都市リヴァプールにある。	A) 海外での学生募集 学生募集を行なう校友を「Alumni International Ambassador」と銘うち、ボランティアで活動している。ただしフォーマルなボランティアと位置づけ、大学のメールアドレスを付与し、名刺を作成している。Ambassadorには申請フォーマットがあり、Alumniチームのマネージャーがそれを管理している。Ambassadorになるのは、①本人の希望②大学からのアプローチの2つがあるが、いずれも公式な申請手順に則って受け付ける。なお、国際部で学生 Ambassadorが1・2名いるが、これはアルバイトとして募集の手伝いをしてもらう。国際リクルートメントチームとAlumniチームには、協力体制がある。 Ambassadorはメールを活用して、受験生に学生生活、就職活動を伝えてもらうほか、時間があればイベントに来て手伝ってもらう。校友はリヴァプールで学生生活を体験しており、受験生の質問に自身の体験として回答できるため、話してもらう価値が大いにある。
⑧ ダブリンシティ大学 (Dublin City University, : DCU)	アイルランドダブリン北部、グラスネヴンに位置し、1975年設立の国立高等学校・本部およびダブリン校を母体として、1980年に発足した市立大学。	B) キャリアサポート 2回生対象に、学生が希望する業界の校友と学内で話をする機会を設けている。校友への連絡は校友担当部署が、学生への連絡はキャリア担当部署が行う。 D) SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス） ^{注11} の活用 LinkedIn ^{注12} 、Facebook ^{注13} 、Twitter ^{注14} などのSNSのほかYouTube（動画共有サービス）のリンクがある。アイルランドの学生は約90%が何らかのSNSに入っているため、オンラインでDCUのネットワークに入りたい気持ちにさせることを重視している。

(2) 他大学調査のまとめ

- ①学生募集については、海外大学では、大学所在国以外の国で海外在住の校友を活用した学生募集や面接が行われており、校友に依頼するための募集方法、審査方法などのマニュアルが整備されている。また、校友担当部署と入試担当部署との連携がとられている。
- ②就職支援については、国内大学ではOB・OG訪問受け入れやCA懇談会など、校友が直接学生に関わる取り組みが行われている。海外大学ではさらにWebを活用したメンター・メンティー制度がある。いずれも、校友の情報を把握する校友担当部署と、学生の就職支援をするキャリア担当部署とが連携し、校友の情報提供を学生に行っている。
- ③イベントについては、国内外の大学とも、ホームカミングデー、植樹会、ボランティア活動など、校友が大学に一同に集うイベントを定期的に設け、校友同士、校友と学生、また大学関係者と話をすることで、縦・横・斜めのつながり（ネットワーク）を感じる機会を設けている。
- ④海外では、コミュニケーション手段としてSNSを活

用している大学が多い^{注15)}。Webを通じて、学生は大学の多くの情報や校友の活動などに接し、大学のネットワークを活用するメリットを体験させ、卒業後の利用につなげるようにしている。

2. 校友・学生・教職員が考える校友による学生支援

(1) 校友アンケート調査

- 目的：校友の学生支援意向とプログラム立案時の留意点を明らかにする。
- 対象者：全校友5,192名中メールアドレスが判明している校友3,962名へWebアンケート
- 実施時期：2009年6月22日～7月6日
- 回答数：246件（回答率6.2%、国内校友57% 国際校友43%、男性42% 女性58%）
- 留意点：アンケート回収率が6.2%と低い点は看過できない。ただし留学生区分比（実数国内56% 国際44%）男女比（実数男性45% 女性55%）と、アンケートと実数の差異が3%前後であり、結果でも構成にあまり偏りが無いと考えられる。

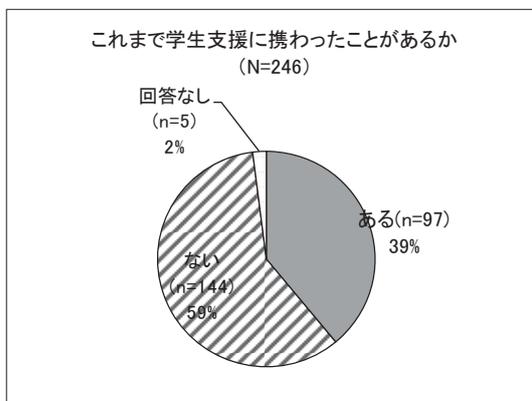


図3 学生支援経験の有無

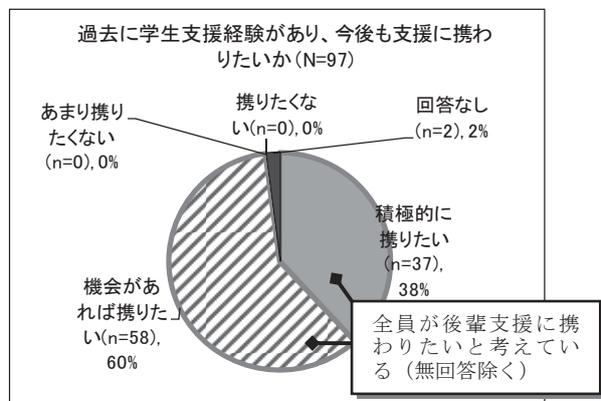


図4 過去に学生支援経験があり、今後も学生支援を行いたい

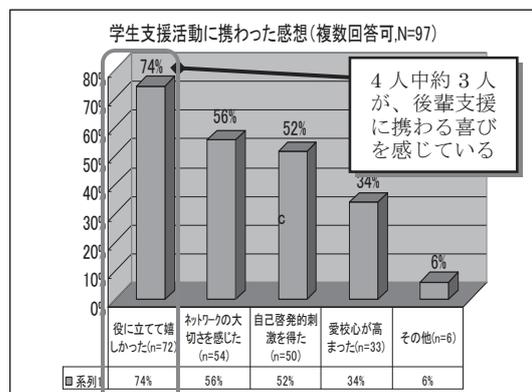


図5 学生支援経験があるものの感想

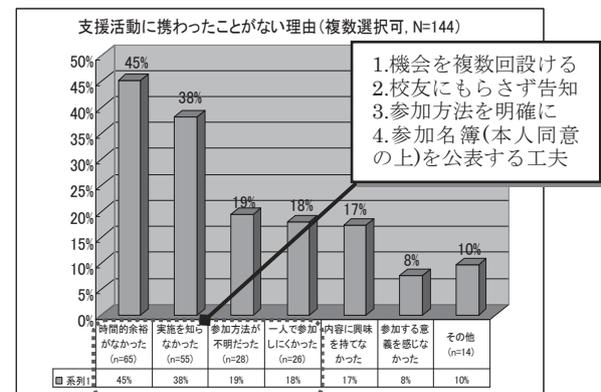


図6 学生支援に携わったことがない理由

これまで学生支援^{注16)}に携わったことが「ある」と回答した校友は全体の39% (図3)である。「ある」と回答した校友に「今後学生支援に携わりたいか」質問したところ、「積極的に携わりたい」38%、「機会があれば携わりたい」60% (図4)と、無回答を除くと全員が学生の支援をしたいと回答している。また、支援に携わった感想は「役に立ててうれしかった」74% (図5)と、4人中約3人が学生支援に携わる喜びを感じている。よって、一度学生支援をすると、学生の役に立つうれしさから、リピーターになる校友が多いと考えられる。

一方、学生支援に携わったことが「ない」と回答したのは全体の59%である (図3)。そのうち「実施を知らなかった」は38%で、実施を知っていたものの「時間的余裕がなかった」45%、「参加方法が分からなかった」19%、「一人で参加しにくかった」18%、「内容に興味を持てなかった」17%となっている (図6)。以上から、校友の支援プログラム設計にあたっては、以下の4点に留意する必要がある。

- ①時間の折り合いがつけやすいよう、複数回の機会を設ける。
- ②学生支援の機会を校友にもらさず告知する。
- ③参加方法を明確にする。
- ④一人でも参加しやすいよう、参加者名簿 (本人同意の上) を公表するなど工夫する。

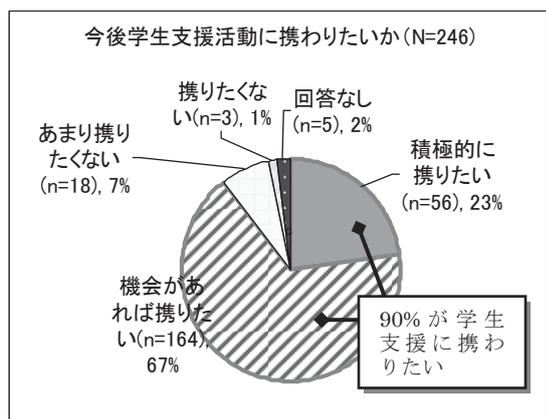


図7 今後学生支援を行いたい

また、回答者全員に「今後学生支援に携わりたいか」と質問したところ「積極的に携わりたい」、「機会があれば携わりたい」が合計90%という回答を得た (図7)。支援経験の有無に関わらず、多くの校友は何らかの形で学生の支援をしたいと考えている。よって、過去に支援

活動に参加したことがない校友も参加しやすいよう、上記4点の留意点が大変重要になる。

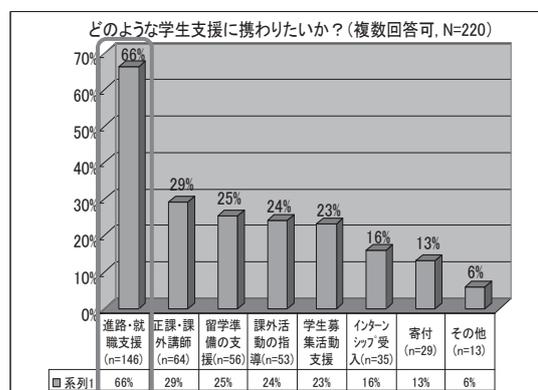


図8 学生支援の内容

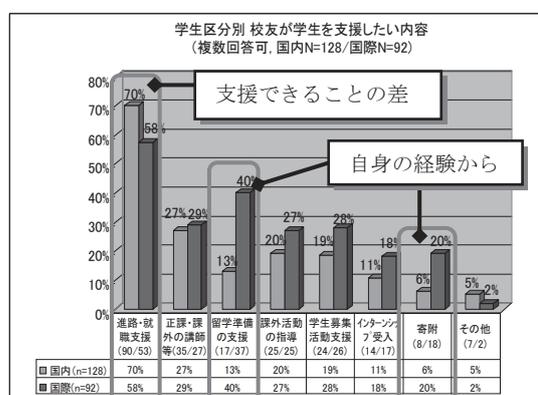


図9 学生区分別 校友が学生支援をしたい内容

「積極的に携わりたい」「機会があれば携わりたい」と回答した校友が携わりたい支援内容は、「進路・就職支援」が66%とトップである (図8)。これを学生区分 (国内か国際か) 別に集計したところ (図9)、10%以上の差異があるのは「進路・就職支援」で国内校友の比率が高く、「留学準備の支援」「寄付」で国際校友の比率が高くなっている。

「進路・就職支援」の場合、国内校友はその多くが日本国内に在住し、直接的な支援ができるが、国際校友は日本国内と海外に分散しており、国内と同様の支援はできないことを反映していると思われる。よって、国内・海外問わず学生支援ができる方法が求められる。

そして、「留学準備の支援」「寄付」で国際校友の比率が高いのは、学生時代に留学前後や金銭的な苦勞をした分、学生を支援したいと考えていると推察できる。

表3 過去に進路・就職の後輩支援を行った校友の「今後の学生支援意向」と「支援したい内容」

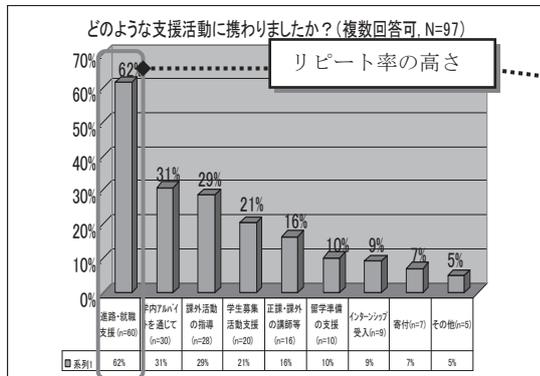


図10 過去にどのような学生支援を行ったか

今後の後輩支援意向	積極的に携わりたい (n=22, 38%)	機会があれば携わりたい (n=35, 62%)	合計(n=58)
今後支援したい内容	回答数 20 構成比 91%	回答数 30 構成比 83%	回答数 50 構成比 86%
進路・就職支援	8 36%	5 14%	13 22%
正課課外の講師	6 27%	6 17%	12 21%
留学支援	10 45%	6 17%	16 28%
課外活動の指導	6 27%	8 22%	14 24%
学生募集活動支援	3 14%	3 8%	6 10%
インターンシップ受入	2 9%	3 8%	5 9%
寄付	1 5%	2 6%	3 5%
その他	2 9%	3 8%	5 9%
合計	57 100%	62 100%	119 100%

表3で、過去に学生支援の経験がある97名のうち、「進路・就職支援」を行った校友60名(図10)の今後の支援意向を分析した(うち2名無回答)。分析では、今後の学生支援として引き続き「進路・就職支援」を挙げる校友が合計86%と多く、学生支援への携わり方も「積極的に携わりたい」38%、「機会があれば携わりたい」62%となっている。特に「積極的に携わりたい」の回答比率は、全体の回答の23%(図7)に比べ高い比率となっていることが注目される。このことから、一度「進路・就職支援」の経験をしたものは、リピーターとなる確率が高いといえ、その意識も積極的なことが分かる。

実施時期：2009年6月23日～7月6日、7月9日～7月13日

回答数：238件(回答率3.9%、国内学生68% 国際学生32%、男性40% 女性60%)

留意点：アンケート回収率が3.9%と低い点を考慮する必要がある。留学生区分比(実数：国内54% 国際46%)および男女比(実数：男性49% 女性51%)は、アンケートと実数の差異が10～15%ほどあり、回答に偏りがあり得ることを考慮する必要がある。よって今回は制約付きの「分析」となる。

(2) 学生アンケート①

目的：学生が校友に支援してほしい意向とプログラム立案時の留意点を明らかにする。

対象者：①全学生6,084名にWebアンケート

これまで校友と交流する機会(図11)は「あまりなかった」28%、「まったくなかった」49%を合計すると77%となり、4人中約3人の学生は校友との接点が少ないと捉えていることが分かる。

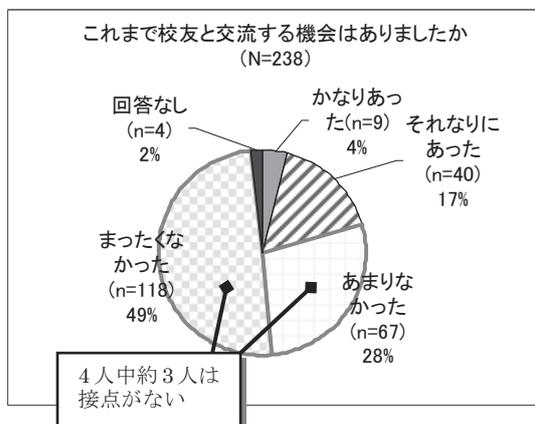


図11 校友と交流する機会の有無

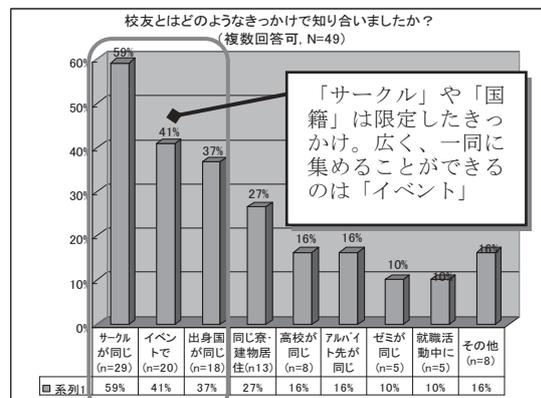


図12 校友と知り合ったきっかけ

また、校友と交流する機会が「かなりあった」「それにあった」と回答した学生は、「サークル」「イベント」「出身国が同じ」といった方法で知り合っていることが分かる(図12)。「サークル」や「国籍」は限定したきっかけであり、広く、一同に集めることができる方法として「イベント」が有効であることがわかる。

今後の支援については、9割以上の学生が校友に支援してほしい(図13)と考えている。

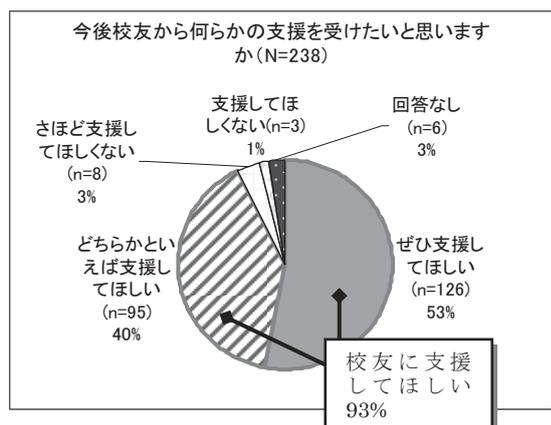


図13 校友から何らかの支援を受けたいか

今後の支援内容については、校友同様「進路・就職支援」がトップである(図14)。「進路・就職支援」に続く支援内容は、「インターンシップ受入」「正課・課外の講師など」「留学支援」「奨学金」となっており、進路・就職に重点を置いた回答となっている。

また、国内学生・国際学生別に支援希望項目を集計したところ(図15)、「進路・就職支援」への関心は国内・国際ともに最も高い。また、国内学生は、全体の回答に近い構成比だが、国際学生は「奨学金」の比率が高くなっている。国際学生は金銭的サポートを校友に期待していることが分かる。

(3) 学生アンケート②

目的：学生アンケート①で「進路・就職支援」の回答が多いことを受けて、具体的にどのような「進路・就職支援」を求めているか明らかにするために再度、調査を行った。合わせて、Web上のコミュニケーション手段の一つであるSNSの利用状況を調べた。

対象者：全学生6,162名にWebアンケート

実施時期：2009年11月12日～11月20日

回答数：199件(回答率3.2%、男性43%女性57%、国内学生64%国際学生36%)

留意点：「進路」には大学院進学も入れるべきだが、対象者数が少なく限定されることから「就職」に絞ったアンケートとした。なお、アンケート回答率が低く、条件付きの「分析」となる。

複数回答による支援希望内容は「面接・集団討論の指導」「履歴書・エントリーシート添削指導」が52%、「会社説明」51%、「就職活動の悩み相談が出来るメンター」49%、「OB・OG紹介」47%と大差がなく、学生は主にこれらの支援を希望している(図16)。しかし、回答を一つに絞ると、「就職活動の悩み相談が出来るメンター」「OB・OG訪問受け入れ」の割合が高く、「面接・集団討論の指導」「履歴書・エントリーシート添削指導」「会社説明」の割合は減る(図17)ことから、学生はスキルの指導や会社の知識よりも、校友でなければ出来ない支援、かつ個別相談の体制を求めていることが明らかになった。

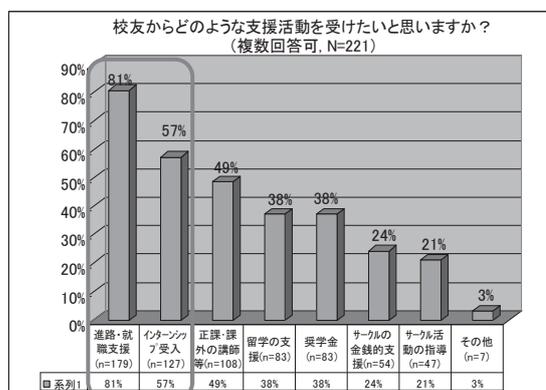


図14 校友からどのような支援を受けたいか

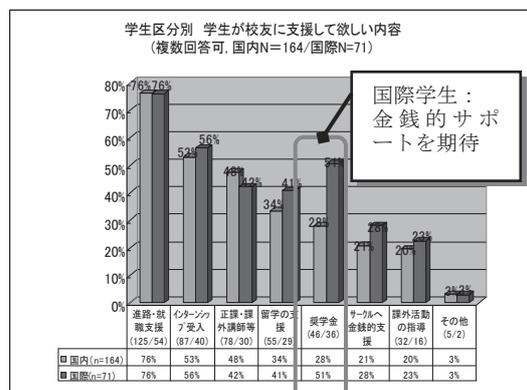


図15 学生区分別 校友に支援してほしい内容

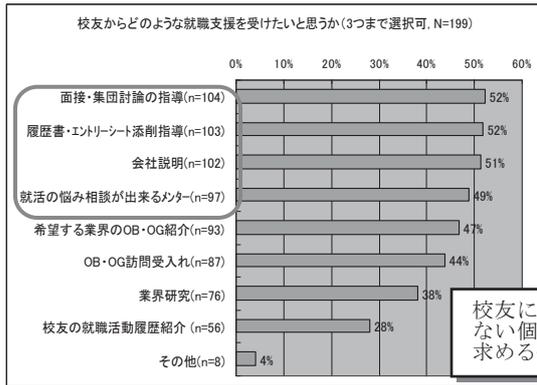


図 16 校友に受けたい就職支援内容

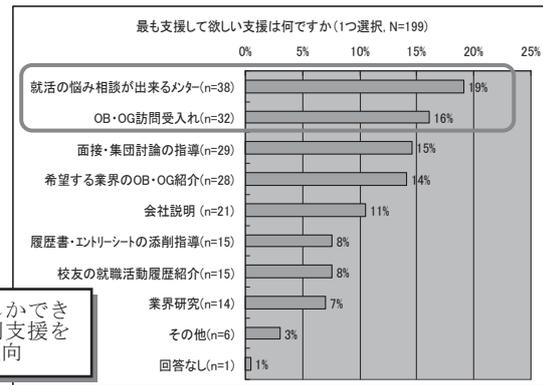


図 17 最も希望する就職支援内容

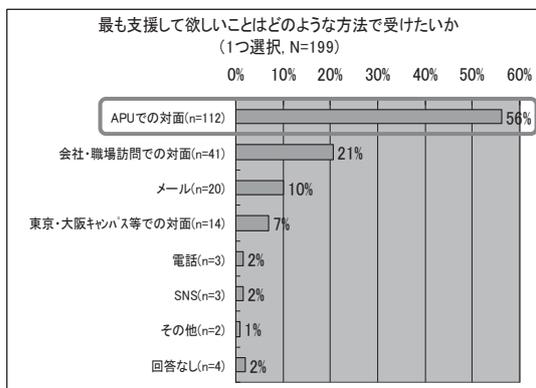


図 18 最も希望する支援内容の受け方

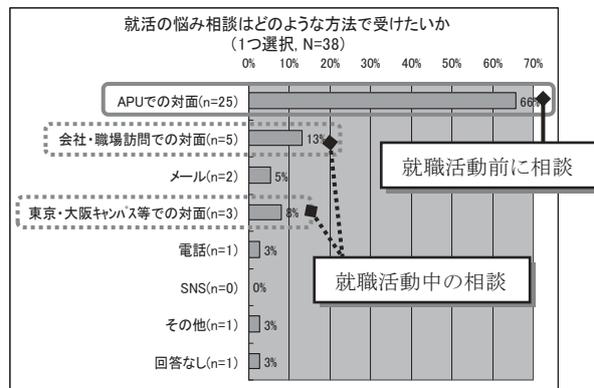


図 19 希望する支援内容の受け方

支援の方法は「APUでの対面」56%と APUでの相談を希望する学生が多い (図 18)。「就職活動の悩み相談が出来るメンター」を選択した場合も同じく「APUでの対面」66%と最も高い結果が出ている (図 19)。APUの学生は関東・関西で就職活動を行うことが多い。対面での相談を APUで受けるということは、就職活動を始める前に校友に相談をしたいということになる。また、

APU以外でも「会社・職場での対面」や「東京・大阪キャンパスでの対面」による相談を求める学生がおり、APU以外に就職活動中も校友と相談出来る機会を設けることを学生は望んでいる。

SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の利用状況についてもアンケートを行った。結果、SNSを「利用している」学生は68% (図 20) で、うち「1日に

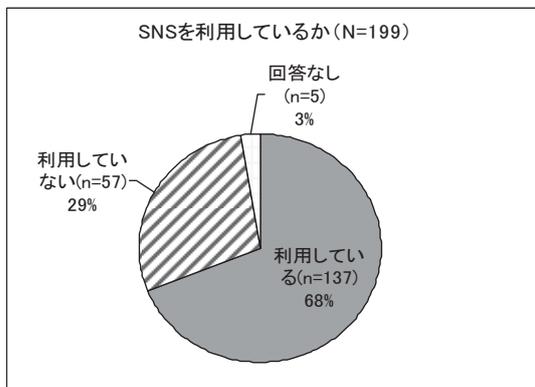


図 20 SNSの利用の有無

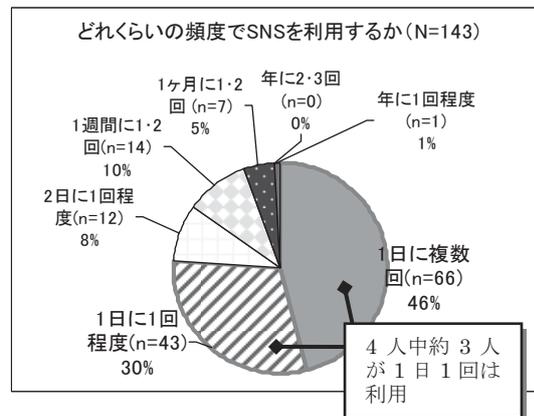


図 21 SNS利用頻度

複数回、「1日に1回」を合計すると76%で、4人中約3人の学生が1日に1回は利用していることがわかった(図21)。

なお最も利用しているSNSは「Facebook」と「mixi」に分かれる(図22)が、mixiは国内学生の利用に限られていることが明らかになった。国内・国際学生の偏りが低いFacebookがAPUには適しているといえる。

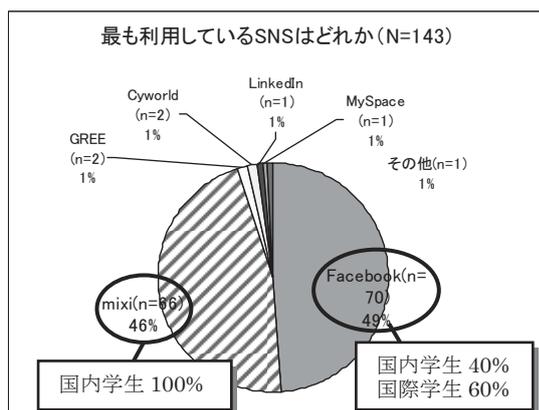


図22 利用している SNS

(4) 職員アンケート

対象者：専任職員約90名、専門契約職員・契約職員約80名、合計約170名

実施時期：職員：2009年7月29日～8月5日

回答数：職員：51件 (回答率33.5%、男性35% 女性65%)

職員が校友に支援してほしい内容のトップは「学生募集活動支援」の49%であり、続いて「OB・OG訪問受入」「就職支援」と就職関連が続く(図23)。職員の場合、グローバル30による国際学生獲得の激化を見据えた、学生募集に対する危機感の表れと考えられる。

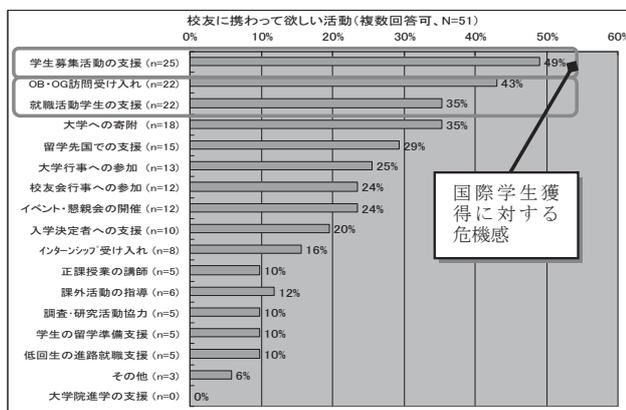


図23 職員が校友に支援して欲しい活動

(5) 教員アンケート

対象者：役職教員(副学長、学部長)ら12名

実施時期：10月8日～10月15日

役職教員が校友に支援してほしい内容は「就職活動学生の支援」「学生募集活動の支援」「留学先国での支援」が42%と上位を占めている(図24)。続いて、「学生の留学準備支援」、「インターシップ受け入れ」、「OB・OG訪問受け入れ」と続く。よって、役職教員も「就職活動支援」「学生募集」そして「学生の留学支援」といった支援を校友に求めていることが分かる。

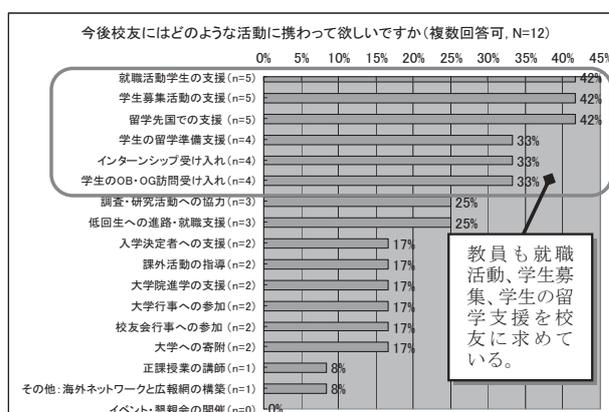


図24 教員が校友に支援して欲しい活動

(6) アンケート調査のまとめ

校友・学生・教職員アンケートから以下の傾向が明らかとなった。

- ① 回答した校友の9割が学生支援に携わりたいと考えており、支援したい内容は「進路・就職支援」が66%を占めている。また、過去に「進路・就職支援」を行った校友は再度「進路・就職支援」を行いたいと考える傾向があり、その参加意識も積極的である。
- ② 過去に学生支援をした校友は、全員が再び学生支援を行いたいと考えている。よって、いくつかのプログラムを提示し、学生支援の機会を設けることが大切になってくる。
- ③ 国内・国際校友別に支援したい内容を集計した結果、「進路・就職支援」は国内校友と国際校友の比率に10%以上の差が生じた。国内校友はその多くが日本国内に在住し、直接的な支援ができるが、国際校友は日本国内と海外に分散しており、国内と同様の支援はできないことを反映していると思われる。よって、国内在住者を中心に直接的に学生を支援できる方法

と、国内・海外問わず学生支援できる方法とが求められる。

- ④ 学生も9割以上が校友に支援してほしいと考えており、支援内容は「進路・就職支援」がトップである。その具体的な支援内容は、回答を一つに絞ると、「就職活動の悩み相談が出来るメンター」「OB・OG訪問受け入れ」の割合が高くなることから、学生はスキルの指導や会社の知識よりも、校友でなければ出来ない支援、かつ個別相談の体制を求めていることが明らかになった。
- ⑤ 上記④の校友による就職支援の方法は、「APUでの対面」を希望する学生が多い。APU学生の多くが関東・関西で就職活動を行うことを考慮すると、就職活動が始まる前に校友との接点を求めていることが分かる。
- ⑥ 教職員が校友に求める学生支援として、進路・就職以外に「学生募集活動」の比率が高い。これは、グローバル30による国際学生獲得に対する危機感の表れと考えられる。
- ⑦ 学生の約2割が、過去に校友から何らかの支援を受けており、その接点は「サークル」「イベント」「出身国が同じ」である。「サークル」や「国籍」は限定したきっかけであり、広く、一同に集めることができる方法として「イベント」が有効であることがわかる。よって、今後校友と学生の接点として有効となるのは「イベント」である。
- ⑧ 学生のSNS利用は約7割に達しており、4人中約3人が1日に1回は利用していることが分かった。また利用しているSNSは大きくFacebookとmixiに分けられるが、国内・国際学生の偏りが低いFacebookがAPUには適している。

3. 文献研究

目的：私立大学校友の学生募集への関与を調査した論文より、校友が学生募集（大学説明会、高校訪問など）および入試プロセス（志願者の推薦、面接試験など）に関与するメリット・デメリットを明らかにし、プログラム構築の留意点とする。

対象文献：鈴木敏明、石井光夫「同窓会および校友会等の友愛組織の学生募集への関与に関する調査研究（1）—私立大学における状況—」

（参考文献3）

調査方法：文献によると、563私立大学に調査依頼書を送付し、249件の回答を得ている。

学生募集活動への関与は、「友愛組織の関与はない」が67.1%を占め、大半の大学では学生募集への友愛組織の関与はない状況となっている。関与する場合、「入学志願者の紹介」「大学案内情報誌・HP作成」「その他学生募集（友愛組織が持つ機関紙に大学・入試情報を載せる、同窓会開催時に大学案内や募集要項を配布する）」と一部関わっている。

このような場合でも、連携協力のデメリットとして「情報のアップデートが難しい」39.8%、「個人的体験による偏り^{注17)}」26.9%が挙げられている。校友に学生募集活動に協力してもらうには、定期的な情報提供と研修制度が不可欠である。

また、入試プロセスへの関与は、8%の私立大学が何らかの形で友愛組織が志願者の推薦に関与する選抜が行われているものの、「友愛組織の関与はない」が81.5%であり、学生募集の同じ回答より高い数値を示している。また、入試プロセスに関するメリットの回答で「メリットは思い当たらない」34.7%、デメリットとして「公平性・公正性の問題」62.2%とあげるなど、入試プロセスに関与するデメリットの指摘が優勢であり、日本では入試プロセスに校友が関与するには、社会的了解がまだ得られていないことがわかる。

以上を踏まえ、今後のプログラムは入試プロセスへの関与ではなく、「学生募集活動」への関与とする。

V. 政策立案

1. 政策の位置づけ

今回立案する政策は、①学生募集活動サポート、②就職活動サポート、③イベントを通じた交流、④Webを活用した交流である。調査・研究との関係でのそれぞれの政策の位置づけは次の通りである。

就職活動サポートは、校友も学生の要望も高いものであり、とくに学生は「メンター」的相談とOB・OGの訪問受入や紹介という校友でなければできない支援を強く望んでいる。また、校友は就職支援活動に参加すると、そのリピーターとなる可能性が高く、学生支援の積極度も強まることも調査で明らかである。この意味で、多く

の校友が就職支援活動へ参加することは、校友の学生支援の取り組みを大きく拡大することにつながる。こうしたことから、「対面による支援『就活カフェ』」と「就職・進学アンケートおよびOB・OG相談依頼」の取り組みを開発した。校友アンケートの設計に学生を参加させることによって、学生に校友の存在と学生支援の役立ちを意識させ、「学生－校友」のつながりを図る仕掛けも組み込んでいる。

学生募集活動サポートは、役職教員や教職員の要望が強いものであり、かつ、国際校友においても進路・就職支援、留学準備の支援に続く比較的高い

支援意欲のある項目である。また、海外での学生募集や留学支援は海外在住の校友が海外在住のままでもできる学生支援であり、積極的に国際校友の力を引き出すことのできるものである。この観点も含めて、海外大学の取り組みに学び、「APU Alumni Ambassador（仮称）」と「新入学生のアドバイザー」の二つの制度を開発した。

校友が学生支援に携わって「役に立てて嬉しかった」、という気持ちが学生支援のリピーターとなる。このために、制度的な学生支援の場だけでなく、校友の個々の体験や経験そしてアドバイスが、校友に「役立ち」感を生み、学生に校友支援の「有益さ」を実感させることにもなる場の設定が重要である。こうした場合は海外父母の「将来のネットワーク」という期待に「校友－学生」という関係で応えるものでもある。校友間そして「校友－学生」の交流とネットワークづくりの場として、「就職・進学アンケートおよびOB・OG相談依頼」の取り組みに加えて、「校友会イベント」と「SNS」を利用した交流の仕組みを開発する。

これらの政策のうち、就職活動と学生募集活動の二つのサポートは、校友を募集することにより連絡の取り合える校友がこぞって応募することが可能である。また、アンケートやSNSは一人で参加できるシステムである。校友アンケートでの学生支援に携わったことのない理由（図6）の主な理由であった、時間の折り合い、支援の機会周知、参加方法の明確化、一人でも参加できるということはクリアするものとしている。

図 25 APU Alumni Ambassador/Freshman Advisor Application Form

2. 個々の政策

(1) 学生募集活動サポート

① 学生募集ボランティア

名 称：APU Alumni Ambassador（仮称）

活動内容：校友が APU 職員とともに国内外留学フェア、説明会、高校訪問を行ない、自分の「学びと成長」の体験・経験を語るほか、大学案内への掲載、現地レポートなどを行なう。

対 象：国内校友、国際校友

募集方法：校友に募集要項、申請書（図 25、下記 APU Freshman Advisor と共用）を校友会メールマガジン・ホームページで配布し、年 1 回公募する。希望する校友は申請書を大学に提出し、アドミッションズ・オフィスで書類および電話審査（必要に応じ面接）をした上で委任する。

採用条件：a) ボランティア活動とし、必要経費（交通費・名刺作成費等）は大学で負担する。

b) 申請書提出の際、データ管理に関する個人情報保護の同意書入手する。

c) 採用後に必ずアドミッションズ・オフィスの研修を受けることとする。

表4 実施手順（案）

時 期	内 容	対 応 部 署
2010年1月中	アドミッションズ・オフィスにて要項・申請書最終確認	アドミッションズ・オフィス
2010年2月上旬～下旬	校友会メールマガジン・ホームページでAPU Alumni Ambassador/ Freshman Advisor を募集	APU 学長室
2010年2月末	第1次申請締め切り	APU 学長室
2010年3月上旬～中旬	アドミッションズ・オフィスにて申請書および電話審査（必要に応じ面接）	アドミッションズ・オフィス
2010年3月末	2010年度APU Alumni Ambassador/Freshman Advisor 決定	アドミッションズ・オフィス
2010年4月	アドミッションズ・オフィスで研修実施	アドミッションズ・オフィス
2010年5月	APU Alumni Ambassador/Freshman Advisor 活動開始	

② 新入学生のアドバイザー

名 称：APU Freshman Advisor（仮称）
 活動内容：APU 入学予定者への生活や勉強面、大学生の心得などのアドバイスをを行う。アドバイスは電話やメール、Skype^{註18)}などを基本とする。
 対 象：国際校友
 募集方法：校友に募集要項、申請書（図25、上記APU Alumni Ambassadorと共用）を校友会メールマガジン・ホームページで配布し、年1回公募で募る。希望する校友は申請書を大学に提出し、アドミッションズ・オフィスで書類および電話審査をした上で委任する。
 条 件：a) ボランティアでの活動。
 b) 申請書提出の際、個人情報保護の同意書入手する。
 c) Webによるカウンセリングマインド教育を行う。
 実施手順（案）：上記（1）-①実施手順と同じ（表4）

(2) 就職活動サポート

① 対面による支援「就活カフェ」

名 称：「就活カフェ@APU」(表5-1)、「就活カフェ@東京キャンパス・大阪オフィス」(表5-2)
 内 容：就職活動中の学生を、校友が学生に直接語りかける形でサポートできるよう、APUで3回、東京キャンパスおよび大阪オフィスで3回懇談できる機会を設ける。経費面から、当面日本国内在住の校友の協力を想定する。
 実 施 日：月1回、土曜日午後開催
 対 応 者：国内在住校友
 告知方法：校友には、スケジュールと各回テーマを校友会メールマガジン・校友会ホームページを活用して告知し、校友有志の参加を募る。また、学生にはキャリア・オフィスより告知する。
 必要経費：約150万円（APUまでの校友交通費約7万円×20名分、ほか）

表5-1 就職カフェ@APU：概要（案）

月	内 容（例）	開催場所	学生参加見込	対応校友数
7月	① 卒業後の未来・自分を知る	APU	3回生80名	6名
10月	② 本当の企業選び	APU	3回生80名	6名
11月	③ コミュニケーション手段としてのエントリーシート	APU	3回生80名	8名

表5-2 就活カフェ@東京・大阪キャンパス：概要（案）

月	内 容（例）	開催場所	学生参加見込	対応校友数
2月	④ 志望度をアピールする面接	東京・大阪キャンパス	3回生50名	8～10名
3月	⑤ よろず相談	東京・大阪キャンパス	3回生50名	8～10名
4月	⑥ よろず相談	東京・大阪キャンパス	4回生50名	8～10名

②就職・進学アンケートおよびOB・OG相談依頼

名称：就職・進学アンケート兼OB・OG相談依頼書（表6）

内容：校友に現在の進路・就職状況などを尋ねる記述式のアンケートを作成し、アンケート公開可の校友情報を学生が閲覧できるようにする。アンケート設計にあたっては、校友会実行委員が関わることとする。合わせてOB・OG相談の対応可否の確認を行ない、OB・OG相談が可能な校友は、学生からの連絡手段・相談方法（メール、電話、Skype、訪問）を明記してもらうアンケートとする。

対象：国内校友、国際校友

閲覧方法：閲覧希望学生はキャリア・オフィスで申込をし、閲覧に際し、「Job Hunting Handbook」に記載されているOB・OG訪問マナーを熟読すること、またマナーを守らない学生は閲覧を禁止する可能性があることを条件とし、了承のサインを得る。

図 26 就職・進学アンケート兼OB・OG相談依頼書

(3) 校友会イベントを通じた校友と学生の交流

名称：APU Homecoming Day プレイベント - Across APU Spirit - (仮称)

内容：2010年10月10日に開催する校友会 Homecoming Day プレイベントとして、APUの精神を伝えるボランティアを事前に設け、APUで校友と学生が知り合う機会にする。プレイベントは、別府をメイン会場に、大分県民・別府市民に10年間の「感謝」を伝えるイベントとする一方、海外の校友会組織でも同日現地でボランティア活動をおこない、別府との一体感を持たせる。これによりAPU Familyとしての絆を感じることが出来る。ボランティアの内容は、各地で決めることとし、活動は2010年以降も毎年開催する。

対象：国内校友、国際校友、APU学生

実施時期：2010年6月または7月

実施団体：校友・学生で構成する Homecoming Day 実行委員会と国内外校友グループ

その他：参加しやすいよう、参加者名簿（本人同意の上）を公表する。また、終了後校友会ホームページに各地の活動の様子が分かるニュース原稿、写真、動画等を掲載する。

(4) SNSを活用した校友と学生の交流

内容：校友会ホームページのリニューアルに伴



図 27 Facebook APU Alumni in the US

表 6 実施手順（案）

時期	内容	対応部署
2010年6月上旬	校友に就職・進学アンケート（含OB・OG訪問受入れ依頼書）送付	APU学長室
2010年6月末	就職・進学アンケート集約	APU学長室
2010年7月上旬	学生向けに閲覧可のアンケート結果とOB・OG訪問情報を提供	キャリア・オフィス

い、SNSの一つである Facebook のリンクボタンをホームページに設け、ホームページの補助的ツール(イベント告知や開催報告は、従来通り校友会ホームページで行う)として Facebook を活用する。また、国内外校友組織ごとに Facebook にグループを作ってもらい、イベントでの利用促進を呼びかける。

趣 旨: Facebook はイベント参加者や都合により参加できない者のコミュニケーションの場、またイベント終了後にその感想を校友や学生が書き込む場と位置づける。結果、イベントに参加できなかった者も様子が分かるほか、校友同士の横のつながりができ、次回の参加を促すツールとなる。

対 象: 国内校友、国際校友、APU 学生

実施時期: 2010 年上半期

その他:「荒らし^{注19)}」や「なりすまし^{注20)}」などを回避するため、校友会担当職員が各校友組織ごとの Facebook ページを週に 1 回チェックする。

VI. 研究のまとめ

本研究のテーマ「校友による循環型サポートプログラム」は、卒業後数年を経た校友が、APU 学生や新入学生支援を通して学生の学び・成長に寄与する喜びを感じると同時に、自身も学生たちから得る「気づき」や「刺激」を人生の糧にするものである。

学生時代に今回提起した政策プログラムに参画したり、利用したりすることによって、学生は今以上に校友

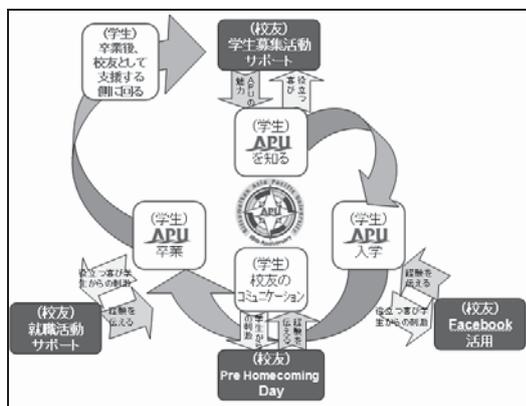


図 28 校友による循環型サポートプログラムイメージ

に接し、その支援のありがたさや母校愛を感じる。実際に、入学や就職活動でその「メリット」を具体的に受けることや、校友会実行委員会が多くの学生を組織し、イベントの企画・計画・運営を通じて、卒業後に支援する側に回る。その受け皿が校友アンケートであり、相談許諾の活動である。そして、こういう活動を通じて校友の参加の拡大とリピーターを作っていくことが「循環型」が目指すところである。

APU をモデルに国際化を進める他大学の追随を許さず、APU が日本の大学の国際化を牽引し続けるためにも、10 周年を迎えたこの時期に「校友-学生-大学」の循環型のつながりを構築しなければ、1 度離れた校友や学生の気持ちを大学に引き戻すことは容易ではない。このプログラムによって、「校友-学生-大学」が一丸となって APU の生命線を守る取り組みとなる。

VII. 残された研究課題

残された主な研究課題は以下の通りである。

(1) 将来を見越した活動計画

現在 APU の校友の多くが 20 代だが、今後 30 代・40 代・50 代となる校友が、それぞれの年代でふさわしい大学や学生との関わり方を考え、大学として青写真を持つ必要がある。

(2) 海外校友会組織への大学のバックアップ

海外校友会組織について、定期的な総会開催や校友情報把握など、今回のプログラムとは異なる運営部分を大学事務局でバックアップする必要がある。

(3) 寄付政策

学生は校友に金銭的支援を期待しており、校友も寄付をしたいと思っている。今後、校友が実際に寄付行動に出るための仕組み作りと、学生時代から、寄付をすることが当たり前と思う意識作りが必要となる。

【注】

1) 循環型とは、校友が学生をサポートし、そのサポートを受けた学生が卒業したら校友として学生をサポートするというサイクルを意味する。

立命館アジア太平洋大学校友会会則	
第1条	本会は、立命館アジア太平洋大学校友会と称する。
第2条	本会は、立命館アジア太平洋大学(以下、「APU」という)の発展を期し、あわせて国際化を推進することを目的とする。
第3条	本会は、次の事業を行う。
(1)	APUとの発展に寄与するための事業。
(2)	APUと卒業生との連携促進の活動を期するための事業。
(3)	学生と立命館大学経営者との連携を図るための事業。
(4)	卒業生等が参加する各種の事業。
(5)	その他学生の目的を達成するために必要な事業。
第4条	本会は、本部を APU 学内に置き、必要に応じ、国内外に支部を置く。
第5条	本会は、次の事項を執行する。
(1)	広報活動。
(2)	基金。
(3)	経費管理。
第6条	本会職員は、次の職員とする。
(1)	APU 代表者。
(2)	APU 教職員および教職員であった者。
(3)	その他、学生または APU に関係のある者で、幹事に推薦された者。
第7条	本会職員は、APU に推薦される。
第8条	推薦委員とは、APU に推薦したことがある者とする。
第9条	本会は、自則において定められた事項を執行し、これを目的とする。

2) APU 誕生物語編集委

APU 校友会会則

- 員会『立命館アジア太平洋大学誕生物語』中央公論社、2009年4月、P.242
- 3) APU 校友会会則 2008年6月28日改正
 - 4) 校友会会則上「校友」には卒業生、そして在生も含まれる。しかしこの論文において便宜上、卒業生＝校友、在生＝学生として表現する。
 - 5) 学生時代のメールアドレスに al. を付加し新たに卒業後のアカウント@al.apu.ac.jp というドメインのメールアドレスを提供するもの。この機能は転送メールのみで、メールボックスは保持していない。転送先として登録された外部のプロバイザーアドレスに、校友あてに送られたメールが自動的に送信されるシステム。
 - 6) 全学的なイベントを企画している団体で、活動時期がイベント終了時まで限定されている団体。
 - 7) 国内学生の父母による組織で、2002年5月に発足。学生の教育活動を進めるための様々な援助のほか、大学の発展や会員相互の親睦をはかることを目的に活動している。
 - 8) 海外父母会は、2000年7月に韓国、2001年3月にインドネシア、2005年11月にタイ、2007年11月に中国・上海、2008年1月に台湾、2009年2月にフィリピン、3月にマレーシア、4月にベトナムで設立している。
 - 9) APUで毎年いくつかの国・地域にスポットを当て、その地域の民族料理や歌・ダンスなどを通じてその国の文化・言語を紹介するイベント。
 - 10) 『カレッジマネジメント144』リクルート、2007年、PP.20-24)
 - 11) SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス Social Network Service) は、社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービスのこと。SNSの主目的は、人と人とのコミュニケーションにある。友人・知人間のコミュニケーションを促進する手段や場、趣味や嗜好、居住地域、出身校、友人の友人といった自分と直接関係のない他人とのつながりを通じて、新たな人間関係を構築する場を提供している。代表的な SNS として、日本最大の会員数を持つ mixi、世界最大の会員数を持つ MySpace がある。
 - 12) LinkedIn (リンクトイン) は、2003年5月にサービスを開始したコミュニケーション・サービス。ビジネスに特化したサービスの特徴としており、2009年8月現在の登録ユーザーは全世界で4,500万人を超える。
 - 13) Facebook (フェイスブック) は、Facebook, Inc. の提供する SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス)。元々はアメリカの学生向けに作られ、当初は学生のみ限定していたが、2006年9月以降には一般にも公開された。日本語版は2008年5月に公開された。
 - 14) Twitter (ツイッター) は、個々のユーザーが「つぶやき」を投稿することで、ゆるいつながりが発生するコミュニケーション・サービス。2006年7月に Obvious 社 (現 Twitter 社) がサービスを開始した。Twitter はブログとチャットを足して2で割ったようなシステムを持つ。各ユーザーは自分専用

- のサイト (ホーム) を持ち、「What are you doing? (今何している?)」の質問の質問に対し、140字以内でつぶやきを投稿する。
- 15) イギリス・アイルランドで訪問した大学6校のうち、5校が大学ホームページや校友会ホームページに SNS ログインのためのリンクボタンを設けている。
 - 16) アンケートでは「後輩支援」としたが、ここでは全体の表現と統一するため「学生支援」とする。
 - 17) 回答例として、自分の在学時をベースに話してしまう、昔のイメージにとらわれ大学の変貌を的確に伝えることができない、独りよがりの説明に陥る恐れがあるなど。
 - 18) インターネット電話サービスで、比較的低速な回線やファイアーウォールの内側でも高音質の安定した通話を実現できる。一般の電話との相互通話を実現する機能 (国によって制限あり) や、Windows、Mac、Linux 版ではビデオチャット機能も備えている。
 - 19) 掲示板やチャット、ブログなどの目的に合わないメッセージを出し、場の秩序を乱すような迷惑や損害を与える行為を継続的に行うこと。
 - 20) ネットワーク犯罪の手法の一つで、あたかもその人のように振る舞う行動全般を指す。

【参考文献】

- 1) 大場茂生「20～30歳代校友の多様なネットワーク開発—首都圏をモデルケースとして」『大学行政研究』第3号 (通巻3号)、2008年
- 2) 山下心作「キャリア・アドバイザー」への継続学習機会提供のためのプログラムの開発—立命館東京キャリア塾の開講『大学行政研究』第3号 (通巻3号)、2008年
- 3) 鈴木敏明、石井光夫「同窓会および校友会等の友愛組織の学生募集の関与に関する調査研究—私立大学における状況—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』2008年
- 4) 江原昭博「アメリカにおける大学の同窓会—その成立過程と日本への示唆」『国立教育政策研究所紀要』第13集、2009年
- 5) 大田信男『コミュニケーション学入門』大修館書店、1994年
- 6) 宮下孝二、森下伸也、君塚大学『組織とネットワークの社会学』新曜社、1994年
- 7) 山崎秀夫『ソーシャル・ネットワーク・マーケティング』ソフトバンク・パブリッシング、2005年
- 8) 黄順姫『同窓会の社会学—学校の身体文化・信頼・ネットワーク』世界思想社、2007年
- 9) 島田裕巳『慶応三田会—組織とその全貌』三修社、2007年
- 10) 孫福弘、小島朋之、熊坂賢次編『未来を創る大学—慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) 挑戦の軌跡』慶応義塾大学出版会株式会社、2004年
- 11) 田中章義『慶応義塾大学 SFC の挑戦』角川書店、2002年

Cyclical Support Program Development by Alumni Members: Aiming for APU supported by alumni members

FURUKAWA, Keiko (Assistant Administrative Manager, Office of the President, Ritsumeikan Asia Pacific University)

IMAMURA, Masaharu (Lecturer, Research Center for Higher Education Administration)

MURAKAMI, Takeshi (Deputy Director, Ritsumeikan Asia Pacific University)

NANAUSHIGAWA, Hisahito (Administrative Manager, Office of the President, Ritsumeikan Asia Pacific University)

Keywords

Alumni, students, support, cyclical, network

Summary

Ten years have passed since the opening of APU. To mark this occasion, this study aims to research and develop the “Alumni-Student-University” support program with the assistance of alumni. “Cyclical Support Program Development by Alumni Members” will provide opportunities for alumni members to enjoy making a contribution to students’ learning and growth through current and new student support. At the same time, alumni members will also be inspired and stimulated in their personal growth by students.

Through this policy, students will be able to benefit by obtaining advice and support on student life as well as in their job search. The Student & Alumni Association Executive Committee will also organize students, as well as planning and running a range of events. This will enable students to support their juniors after graduation. Activities after graduation include student recruitment, student life/job hunting advice, and participation in events and the SNS.

This “cyclical” support program aims to increase the number of alumni participating in these activities, as well as the number of repeat participants, with alumni, students, and the university working together to develop this support system at APU.